

「フレッシャーズ・セミナー」と初年次教育

秋 富 創

はじめに

1970年代のアメリカの大学を起源とする「初年次教育」“First-Year Experience”は、1990年代後半以降、我が国の大学にも急速に普及していった。その背景には、18歳人口の減少と相まって高等教育機関への進学率が上昇し、高校卒業者の多数派が進学するという「ユニバーサル化」が進行することによって、共通の一定水準が喪失し、スタンダードそのものの考え方が疑問視されるほど多様な新入生が入学してくるようになった、という状況が存在している¹。2008年には初年次教育学会が設立されたことから窺えるように²、このような教育の重要性は、昨今ますます高まっていると言えよう。本稿では、筆者が2021年度から担当する「フレッシャーズ・セミナー」において展開している、そのような初年次教育の一端を紹介するとともに、授業を行う際、日頃から筆者自身が特に留意している点についても、少々論じてみたい。

I 授業の概要

1 初年次教育と「スタディ・スキル」

初年次教育とは、「高校（と他大学）から円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」のことであり³、具体的には、①大学生活への適応、②大学で必要な学習技術の獲得（読み、書き、批判的思考力、調査、タイム・マネジメント）、③当該大学への適応、④自己分析、⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入、⑥学習目標・学

習動機の獲得、⑦専門領域への理解、といった内容から構成されている⁴。筆者がこの授業で展開している内容は主に、この中の②に当たる。学習技術とは、「スタディ・スキル」あるいは「アカデミック・スキル」とも呼ばれており、両者はほぼ同義で用いられる。ただし後者は、大学などの高等教育機関という「場」に限定される用語である。たとえば、「アカデミック・ライティング・スキル」ならば、大学でのレポートや論文の書き方、といった意味になる⁵。ちなみに筆者は、シラバスにおいて「スタディ・スキル」と表現している。

2 使用教材

ECサイトなどで検索してみると一目瞭然であるが、このような「スタディ・スキル」や「アカデミック・スキル」に焦点を当てた書籍は、近年かなり公開されている。それらは学生向けに書かれたものではあるが、構成を見る限り、多くが授業のテキストとして使用されることを想定しているようである。現在筆者がテキストとして使用しているのは、世界思想社編集部編『大学生 学びのハンドブック』（世界思想社刊）である（2025年9月現在、最新版は昨年出版された6訂版）。そのほかに、この本だけでは不足している内容については、文末の注で挙げた複数の書籍を予め参照した上で、パワーポイントを別途作成し、これをPDFの資料として配付している。

3 授業の構成

この授業のシラバスには各回それぞれの予定が記されているが、大別すると全体は、次の6項目から構成されている。

(1) 大学生活とは何か

この授業の目的や教員のプロフィールなど、全体に関わる導入資料は初回のオンライン授業時に配付するが、初対面となる第2回の授業ではまず、学生に簡単な自己紹介をしてもらう。この際「自己紹介のひな形」を活用し、初顔合わせの学生同士でも進んで発言できるような環境を作っている⁶。追加の項

目として、「なぜ現在の学部・学科への入学を希望したのか」ということは個人的に興味があるので、そのことも合わせて話すように伝える（中には「ここしか合格しなかったから」といった具合に、消極的な理由を挙げる学生もいる）。その後授業の本題に入る訳だが、ここではまず、厳密な意味での「学習技術」を逸脱することになるが、「大学生活とは何か」という導入的な話から始めることにしている。この内容は比較的多岐にわたっており、「大学での学業全般・日常生活」といったトピックには止まらず、18歳になったら何が出来なのか、まだ何が出来ないのかといった具合に、「社会生活上の権利と義務」という法律に関わるトピックをも含んでいる⁷。

(2) ノートの取り方

これはいわゆる「ノート・テイキング」のことだが、上手いノートを取るためには、教員の講義スタイルが、「プリント配付」「板書」「しゃべくり」「パワーポイント」といった型に分かれることを踏まえ⁸、各授業がどの型なのかを見極めて、臨機応変に「取り方」を変えていくことが必要となる。もっともどの型であっても、キーワードを把握する、余白をたっぷりとり、記号や矢印などを使用する⁹、といった根本的な部分では共通している。ノートとは授業中、ただ漫然と板書を「写経」するためのものではないし、活用の機会が（期末の試験・レポート対策を含めて）むしろ授業後にこそ存在する、まさに1つの「自己表現」だからである。この点、ノート1頁を、ノート・キーワード・サマリーの3つのエリアに分割する「コーネル・メソッド」は、古典的でありながら、今なお有益なノート・テイキングの方法だと考えられる¹⁰。

近年ではICT技術の発展によって、タブレットなどの電子端末でもノートを取ることが可能である。筆者自身は、「検索」を通じて後からノートを活用できる、データとして4年間（あるいはそれ以上）の学びをクラウドなど1カ所に蓄積することができる、という利点からこの手法には大いに賛成であり（ただし手書きの場合、OCR処理の手間はかかる）、別途パワーポイントの資料を作り、紙のノート（綴じノートまたはルーズリーフ）を使う場合と比較さ

せる形で、そのメリットとデメリットについても説明している。

(3) 学術的文章の読み方

まさに「基本のキ」の話になってくるが、ここではまず、大学で扱われる論文・レポート・研究計画書などの「学術的文章」とは、客観性を担保する創作物であり、書き手の主観が尊重される、作文・感想文・随筆・小説といった「文学的文章」とは全く異なるものであることを確認する¹¹。後述するように、このような大前提が学生には案外理解されていない。学術的文章の特徴を一言で表せば、全体の構成が序論・本論・結論の三部構成になっており、筆者の「(理由を含んだ)主張」とそれを裏付ける「根拠」から成り立っている論理的な記述、ということになる¹²。

これらを理解した上で、そのような文章を正確に読み、自分なりの理解に移し替えて、それを他の人に分かるように表現し、そこから自分なりの問題提起に始まり、否定、賛成、代案に至るまでの道筋を論理的・実証的に示すような「クリティカル・リーディング」(批判的読解)が必要になってくる¹³。ただしこの際「批判的」「critical」という言葉は、「肯定的」「affirmative」、「positive」の対義語ではなく、「否定的」「negative」と同義語ではないことに注意しなければならない。つまり「批判的に読む」というのは、筆者の主張に反対して読むことではなく、まず筆者の展開している議論を理解することを目指し、その議論の流れに沿って考え、その上で論証部分に論理の欠如や矛盾があれば、これを取り上げて精査することを言うのである¹⁴。

学術的文章の読み方としては、このような「クリティカル・リーディング」(分析読み)のほかに、文章の大意をつかむために、素早く文章全体に目を通して、ざっと意味をすくい取って理解する「スキミング」(すくい読み)、特定の情報を狙って、重点的に素早く読む「スキヤニング」(探索読み)、の2つがあり¹⁵、状況に応じて使い分ける必要がある。

さらに、次項(4)とも関わってくるが、日本語の「段落」と英語の「パラグラフ」が異なる概念である、という点も重要である。段落には「形式段落」

と「意味段落」があり、このうち後者と「パラグラフ」は似ているものの、正確には同一の概念ではない¹⁶。学術的文章においては、「1つのパラグラフでは1つのトピックしか書かない」という原則があり、「パラグラフ」は1つの主題文（トピック・センテンス）と複数の支持文（サポーティング・センテンス）から構成されている。したがって、複数のパラグラフから構成される文章全体の趣旨は、主題文をたどるだけで把握できることになるし、各パラグラフの頭と尻にある接続表現に注目すれば、パラグラフ同士の意味関係を捉えることも容易になってくる¹⁷。

(4) レポートの書き方

ここは、学術的文章を「読む」のではなく「書く」という意味において、上記「基本のキ」の話の続きとなる。「レポート」と「論文」の厳密な意味の区別はないが¹⁸、この授業は初年次教育の一環として行っているので、説明はレポートに限定される。上記の「読み方」と同様であるが、レポートの「書き方」の肝も「序論・本論・結論の三部構成で記述する」「主張および、それを裏付ける根拠を示す」という点にあり、これらは「パラグラフ・ライティング」を意識しながら行うことになる。

まず序論では、①議論の前提となる情報に当たる「状況の設定」、②テーマの絞り込み、問題提起に当たる「問題の焦点化」、③提起された問題への答え、論証のための展開予告に当たる「主張」が順に記述される¹⁹。学生には意外に感じられるかもしれないが、主張（結論）の内容を予告しておくのも序論の役割である。

本論では、序論で予告された「主張」を裏付けるための「根拠」を積み重ねる、という地道な作業を行っていく。ここで言う根拠とは、いわゆる「事実」のことであり、この事実の記述こそがレポートの骨格となる²⁰。学術的文章における「事実」とは、「客観的に検証することが可能な事柄」「複数の人びとからみて真であると認められる事柄」といった意味を持っている²¹。このような「事実」の中には、信頼できる機関が公表した統計データ、新聞記事などに加

えて、書籍・論文といったいわゆる「先行研究」（他者の主張）が含まれる。これらは、木下の言葉を借りれば「研究・調査・伝達・教育などによって得られる、または伝えられる知識」のことであり、一言で表現すれば「情報」となる。前述した通り学術的文章とは、書き手の主観を記すだけの文学的文章とは異なるのであり、本文ではこれらの情報（つまりは事実）と、それを根拠とする自分の意見（つまりは主張）のみを記述しなければならない²²。

結論では、これまで繰り返してきた文章の内容を簡単にまとめ、主張を再確認する。この際、本文中で採用した研究・調査手法の限界や、今後の展望などを付記することもできる²³。

学術雑誌に掲載される論文とは異なり、レポートの読み手はほぼ、その授業の担当教員に限られるであろうが、それでも誰にとっても読みやすい、分かりやすい文章を書くに越したことはない。前項（3）で取り上げた「パラグラフ」に関する、「1つのパラグラフでは1つのトピックしか書かない」という原則とは、論理的な文章はもちろんのこと、分かりやすい文章を書くためにも順守されなければならない。甚だ残念ではあるが、学生のレポートを採点していると、この原則を全く理解していない文章ばかりお目にかかる。複数のトピックから成る「意味段落」、何となく文章が長くなったので改行するという「形式段落」、といった類いである。このような文章が、非常に分かりにくいことは言うまでもない。

分かりやすい文章とは、このような「パラグラフ・ライティング」を踏まえた上で、たとえば、①1つの文は短くする（60字程度）、②逆茂木型^{きかもぎ}の文は避ける、③（途中で主語が入れ替わってしまうなどの）首尾一貫しない文は避ける、④（どこを修飾するのか曖昧な）紛らわしい文は避ける、⑤能動態の文を書く（「…と思われる」といった受動態の文では、「誰が思う」のか曖昧になり、自ら発した意見の責任を回避したように見える）、といったルールを守っているものを指す。これらは木下の整理によるものだが、彼は特に紙幅を割いて②を強調している。逆茂木型の文とは、「修飾節や修飾句は名詞の前に置く」という日本語特有の構文規則に由来し、文章全体の中で「肝の部分」が最後に登

場する構造を有している。読者からすれば、文章を目で追いながら散々待たされたあげく、最後の最後で本当の真相に辿り着くという趣向である。他方で英語などの欧語では、長い修飾節や修飾句は、関係代名詞や分詞形を使って名詞の後に置くことができるため、文章全体の中でまず「肝の部分」を宣言してしまい、後から情報を付加することが可能となる。したがって、生来的に日本語よりはるかに読みやすくなるという塩梅である。日本語ネイティブの我々は、このような日本語の運命を甘受した上で、修飾節や修飾句がだらだらと続く、頭でっかちの文章を極力書かないように努めなければならない²⁴。

最後に、主張を裏付けるための根拠となる、先行研究を始めとする「事実」の引用方法について言及する。まず引用には、他者の言葉を一言一句違わず引用する「直接引用」と、それを自分の言葉で要約して言い換える（パラフレーズする）「間接引用」がある。特に前者には、カギ括弧で括って本文中に埋め込む方法と、本文とは別に示すいわゆる「ブロック引用」がある。また、いわゆる「孫引き」は可能な限り避けるべきである。次に、先行研究の出典を示す方法には、本文中の引用箇所の直後に「注番号」を記した上で、レポートのページごとあるいは末尾に「注」の欄を設け、そこで出典を記す「バンクーバー方式」と、本文中の引用箇所の直後に出典中の著者名と発表年のみを記し、レポートの末尾に参考文献リストを設けて、詳しい出典を示す「ハーバード方式」がある。出典として示すべき情報は、たとえば書籍ならば、著者名、書籍名、（翻訳書ならば訳者名）、出版社、出版年、引用頁であり、学術雑誌に掲載された論文ならば、著者名、論文名、（翻訳文ならば訳者名）、雑誌名、巻号数、刊行年月、掲載頁である。これらの表記方法には、アメリカ心理学会のAPA方式、アメリカ現代文学協会のMLA方式、科学技術情報流通技術基準のSIST方式、などがある²⁵。なお、筆者は日常的に「バンクーバー方式」とMLA方式を利用しているが、この授業では学生に特定の方式を強制するようなことはしていない。各学部で演習などを担当する教員の指示に従えばよいであろう。

(5) 資料の探し方

これまで何度も「先行研究」や「事実」といった言葉が登場したが、ここでもようやく、そのようなものが載っている資料を実際どのように探せばいいのか、という話が始まる。もちろん本稿が参照する、スタディ・スキルを解説する全書籍がこの内容を扱っている訳であるが、この授業では1回分（通常は第10回）を、万代記念図書館が行っている「図書館オリエンテーション」に充てて、専門職員に「資料の探し方」についての授業をお願いすることになっている。当日は、先方が準備して下さったレジュメに沿って説明が進行するほか、学生が持参するパソコンを使った検索演習も行われる。

(6) 個人発表

これは、演習などの少人数授業で行われることの多い、自ら調査・研究した内容を皆の前で口頭発表するという、いわゆる「プレゼンテーション」のことである。この言葉は元来、広告業界で生まれたものであり、広告会社が自分たちの企画案を顧客に説明し、契約を獲得するために「説得」する発表をこのように呼称していた。他方で授業で行われる発表とは、そのような「説得」ではなく、自分の考えを出席者に分かってもらおうとする、「説明」の側面に重きを置いたものである。つまりその目的は、自分の思いや考えを他人に正確に伝えることにある²⁶。

この授業では第12回以降を、学生によるこのようなプレゼンテーションに充てている。発表の順番はくじで決められるが、当日のテーマ自体については一切制限を設けない。相模原キャンパス4学部の学生が混在するため、勉学に限っても学生自身の興味関心は元来多様なはずである。したがって、たとえば私の専門領域（経済学）に沿う共通テーマを予め設定するといった具合に、テーマ自体に縛りをかけることは全く現実的ではない。少々語弊はあるが、学生には勉学、趣味、アルバイトなど何でもいいので、とにかく自分の興味のあるテーマを1つ選択し、それを皆の前で発表するという体験をまず味わってもらいたい、というのがここでの趣旨である。

学生は発表の当日までに、レポートのような「書くプレゼンテーション」ではなく、まさに「話すプレゼンテーション」の入念な準備を行わなければならない²⁷。発表の際用いるツールはパワーポイント限定であるが、制限時間内に収まるのであれば、その形式は自由である。たとえば過去には、途中でクイズを出題して聴衆と対話する、内容に関連するYouTubeの動画を視聴する、といった「変則的」な発表もあった。

Ⅱ 留意すべき諸点

ここでは毎回の授業を進めるにあたり、常日頃から特に留意すべきだと個人的に感じている点について、「自戒」という意味も込めて少々論じてみたい。

1 学生への「呼称詞」

これは、男子学生をどのように呼称すべきかという、本学のような共学校ならではの問題である。特にこの授業のような、学生との対話が密な少人数・演習形式の場合には切実とならざるを得ない。筆者の前任校である女子短期大学の学生は全員女性であったため、正直このような問題を考える必要性は全くなかった。一般に、親疎の度合いが中程度である目下あるいは同等の人物に対し、「女性であれば『～さん』、男性であれば『～くん』」という呼称詞の使い分けがなされる現象はよく見られる²⁸。他方で近年、学校や職場などで、男性に対しては「くん付け」、女性に対しては「さん付け」という使い分けをすることは、ジェンダーの平等・公正という観点から好ましくない、性的マイノリティに対する特定のジェンダー役割の押しつけにつながる、といった言説が見られるのも事実である²⁹。これまでのところ筆者は「使い分け」派なのであるが、これからは、今の世にそぐわないこのような古い考え方自体を、アップデートする必要があるのかもしれない。

2 「レポート」という名称

前述した通り、学術的文章と文学的文章が全くの別物であることは、スタデ

ィ・スキルの「基本のキ」である。ただし小・中・高と、余りにも「感想文」を書くことに慣れてしまっているせいか、大学の期末レポートでも、全く同じ体の文章を平気で提出する学生は一定数存在する。当然ながらこれは「レポート」ではない。甚だ個人的な感想になるが、全体が「…と思う」「…と感じる」といった表現で覆い尽くされている際には、特に注意が必要である。もちろんこのような表現が、「事実」という根拠を踏まえた上での、「自分の意見」の表明であるならば何ら問題はない。

とは言うものの、個人的には実は、このような学生の「思い込み」に同情する気持ちがなくはない。その理由の一つは、日本語で言うところの「レポート」という言葉の「語感の悪さ」にある。「レポート」「report」とは、そのまま訳せば文字通り「報告（書）」である。たとえば、“OED”にはこの言葉の意味がいくつか挙げられているが、その冒頭には“An account of a situation, event, etc., brought by one person to another, esp. as the result of an investigation”とある³⁰。“investigation”という表現はあるものの、この“account”が日本語で言うところの「論文」「paper’, “dissertation”, “thesis”を含むものなのかどうか、俄には判然としない。おそらく含まないのであろう³¹。他方で我が国では、「レポート」と「論文」は明確にはほぼ同義の言葉として認識されており、両者を分量の差で区別すると考えるのが一般的である³²。しかしながら、ともすれば「報告（書）」という意味に受け取られかねないこの言葉を、たとえば、本稿が論じるような初年次教育を履修していない（あるいは、履修したとしてもその内容を十分理解していない）学生が、果たして「論文」と同義であると考え得であろうか。誰が最初に「レポート」と表現したのか定かではないが、その人物はせめて「小論文」くらいの表現を使うべきだったのではあるまいか³³。

両者が正確には同義でないとするれば、果たして日本語で言う「レポート」とは、英語でどのように表現すればいいのか、という疑問が最後に残る。これについては木下が1つの答えを出している。彼は、1980年代にアメリカの大学に留学した女子学生が寄せた手紙を引用しながら、彼女が彼の地で、どのように「レポート」と格闘したのかを紹介している。その手紙の中で本人は、「レ

ポート」のことを“research paper”と表現しているのである³⁴。

3 「主観的記述」と「客観的記述」

木下がこのような手紙を引用した大きな理由とは、「事実」と「意見」を区別することの重要性を訴えるがためであった。彼によると学問の世界では、事実と意見とは黒と白ほど違う。欧米では、この2つを峻別する訓練が言語技術教育の礎石とされている一方で、我が国の国語教育ではこのような訓練が欠落しており、ひいてはそのことが学問の進展にも影を落としている³⁵。先ほど言及した、「…と思う」「…と感じる」という表現が多用されている「レポート」についても、その多くは「感想文」の体であるため、学生は「自分の意見」のみを書くことに汲々としており、たまに顔をのぞかせる「事実」も、そのような「意見」と渾然一体となってしまうことが多い。その上、「事実」に関する正確な出典が付されていないとすれば、こちらの採点も最早お手上げである。

この2つの峻別については、次のような例が分かりやすい。「東京タワーの高さは333メートルである」というのは「事実」であるが、「東京タワーは優れたデザインの建造物である」というのは「意見」である。後者は、真偽の判断を下せない、単なる個人の主観的な（意見の一種である）感想に過ぎないからである³⁶。レポートを執筆する際には、この両者を峻別することを旨とし、真偽の判断が可能である客観的な「事実」と、それを根拠とする「意見」（主張）とを展開することになる。この場合は、東京タワーのデザインが優れているという「意見」を裏付ける、何か客観的な「事実」を挙げることができれば、その「事実」と共にこのような「意見」を記述することは可能になる³⁷。

このように「事実」と「意見」の峻別の大本には、レポートの客観性の担保という問題が存在する。当然この問題は、それらの実際の表記に関しても当てはまる。「論文とは『客観的』でなければならない」ので、たとえば、「私は絶対正しいと信じる」を「…ということは確実と思われる」へと修正するといった具合に、通常、主観的記述を客観的記述へ変更することが求められるのであ

る。しかし、戸田山が言うように、論文で認められない主観的記述とは、「私」を主語にした文のことではなく、論拠が示されていない判断・主張のことである。単に「私」が明示されている能動態を形式的に受動態にすれば良い、といった程度の話ではない。したがって、客観的な根拠さえ伴っていれば、「私は絶対に正しいと信じる」という主観的記述であったとしても一向に差し支えないし、主語が「私」であるかどうかは些末なことに過ぎない、という訳である³⁸。

ここで「私」の意見を表明することが許されるのであれば、まさに政治家のような物言いではあるが総論賛成、各論反対といったものになる。確かに「私」という主語の有無が事の本質ではない、という戸田山の考え方は正しい。さらに、受動態が責任の所在を曖昧にする表現である、という先ほどの木下の考え方も正しい。しかしながら、このような原則を頑なに順守することだけが、常に正解であるとは到底思えないのである。いくら論理的な分かりやすさを追求する学術的文章と言えども、日本語で書かれる以上、日本語の語感の世界に支配されている。「私」という主語を連発する文章がしばらく続いた場合には、ときには箸休めをして「…と思われる」と、「責任逃れ」をしてもいいのではないかと個人的には思う。

おわりに

本稿を執筆するにあたり、学生が今年度前期授業（青山スタンダード及び学部科目）で提出したレポートを改めて見直してみたが、この中に真の意味で「レポート」「research paper」と呼べるものが果たしてどれくらいあったのか、正直疑わしいと言わざるを得ない。それは一つには、筆者も含めて、我々一人ひとりの大学教員が学生に対して、きちんとした「大学における学修の作法」を伝えてこなかったことにある。

今夏世間を騒がせた、田久保真紀伊東市長（当時）の「学歴詐称疑惑」に関連して、橋下徹元大阪府知事は、「入学はしてて、除籍か卒業ってそんな大した話じゃないんじゃないの？と僕は思うんだけど」と述べている³⁹。しかしな

がら、たとえこのような認識が、彼自身が大学生であった30年以上前の世間の常識であったとしても（そうではなかったと信じたいが）、今日日このようなことを公言する大学教員がいるとすれば、その者は直ちに職を追われるに違いない。本稿が論じたような、初年次教育で培われる学生一人ひとりの「スタディ・スキル」とは、その人物の「学士力」の涵養、あるいは「人的資本」の蓄積に資するのみならず⁴⁰、ひいてはその人物の（中退や除籍とは全く意味が異なる）「大卒資格」（学士）修得にも影響を及ぼすのだということを、今ここで改めて肝に銘じておきたい。

- ¹ 川嶋太津夫「初年次教育の意味と意義」、濱名篤ほか編著『初年次教育』、丸善、2006年、5頁；濱名篤「日本における初年次教育の可能性と課題」、同書、245頁。
- ² 山田礼子「日本における初年次教育の動向—過去、現在そして未来に向けて」、初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』、世界思想社、2013年、12頁。
- ³ 川嶋、前掲論文、3頁。
- ⁴ 濱名、前掲論文、246頁。
- ⁵ 上村和美「初年次教育におけるスタディ・スキル」、初年次教育学会編『現状と未来』、83頁。
- ⁶ 吉原恵子ほか『スタディスキルズ・トレーニング（改訂版）—大学で学ぶための25のスキル—』、実教出版、2017年、8-9頁。
- ⁷ 同書、12-26頁。
- ⁸ 南田勝也ほか『ゼミで学ぶスタディスキル（新版）』、北樹出版、2024年、20-23頁；佐藤望ほか『アカデミック・スキルズ（第3版）—大学生のための知的技法入門』、慶應義塾大学出版会、2020年、32-36頁。
- ⁹ 上村和美ほか『知へのステップ（第5版）—大学生からのスタディ・スキルズ—』、くろしお出版、2023年、23頁；南田ほか、前掲書、23-24頁；佐藤ほか、前掲書、36-37頁。
- ¹⁰ 大江一平ほか『入門ゼミナール 初めて学ぶアカデミック・スキル』、学文社、2023年、18-19頁。
- ¹¹ 渡邊淳子『大学生のための 論文・レポートの論理的な書き方（改訂版）』、研究社、2022年、2頁。
- ¹² 同書、5-11頁。
- ¹³ 佐藤ほか、前掲書、82頁。
- ¹⁴ 天野明弘ほか『スタディ・スキル入門—大学でしっかりと学ぶために』、有斐閣、2008年、38-40頁。
- ¹⁵ 上村ほか、前掲書、33頁。
- ¹⁶ 木下是雄『レポートの組み立て方』、ちくま学芸文庫、1994年、180-181頁。したが

って、吉原ほか、前掲書、79 頁、にあるような、「パラグラフ＝意味段落」という理解は間違いである。

¹⁷ 渡邊、前掲書、54-59 頁。

¹⁸ 南田ほか、前掲書、52 頁。

¹⁹ 渡邊、前掲書、66-67 頁。

²⁰ 木下、前掲書、46 頁。

²¹ 大江ほか、前掲書、29 頁。

²² 木下、前掲書、9-10 頁。他方で三宅が指摘するように、2000 年代の IT 革命の到来と共に、「情報」とは、『他者や歴史や社会の文脈といったノイズ』の除去された『知識』となってしまった。したがって、現在「情報」という言葉を（特に学生に対して）使用する際には、人文知という意味での（書籍から得られる）「知識」と混同しないように注意する必要がある。三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』、集英社新書、2024 年、第 8 章。

²³ 渡邊、前掲書、11 頁。

²⁴ 木下、前掲書、193-218 頁。

²⁵ 井上貴翔ほか『大学生のための論文・レポート作成法（改訂版）—アカデミックライティングの基本を学ぶ—』、学術図書出版社、2024 年、24-29 頁；渡邊、前掲書、77-89 頁；天野ほか、前掲書、214-216 頁。

²⁶ 上村ほか、前掲書、168 頁。

²⁷ 同書、169 頁。

²⁸ 林みどり・大島デヴィッド義和「付加的呼称詞『さん』『くん』の使用とジェンダー中立性—実態と規範をめぐって—」、『ことば』、42、2021 年、74 頁。

²⁹ 同論文、77 頁。

³⁰ OED online, “report” の項目 (Meaning & use)。

³¹ 『ジーニアス英和辞典（第 6 版）』（大修館書店）の“paper”の項目では、「研究論文」と並び「レポート」という訳も載っているが、「この意で report とはいわない」と注記されている。

³² 南田ほか、前掲書、52 頁。

³³ 木下は辞書を引用する形で、「レポート」の意味の 1 つを、「学生が提出する研究結果の小論文」としている。木下、前掲書、9 頁。大学のカリキュラムの中では、「小論文」という言葉が全く使われない訳ではないようである。たとえば、天野ほか、前掲書、1 頁；佐藤ほか、前掲書、120 頁。ただし、大学で通常「小論文」といえば、入学試験科目の名称を意味すると考えられる。

³⁴ 木下、前掲書、13-21 頁。

³⁵ 同書、25-35 頁。

³⁶ 井上ほか、前掲書、5-6 頁。

³⁷ ただし、すべての「意見」が、何らかの客観的な「事実」によって裏付けられるとは限らない。たとえば、「○○は面白い」という意見は、根拠を挙げて当否を検討することができない性質のものである。木下、前掲書、10 頁。

³⁸ 戸田山和久『最新版 論文の教室 レポートから卒論まで』、NHK 出版、2022 年、48-50 頁。

³⁹ 8 カンテレ NEWS, 2025 年 7 月 10 日。 <https://www.ktv.jp/news/feature/250709-takuboshicho/> (最終閲覧日 2025 年 9 月 1 日)。

⁴⁰ 「学士力」の要素の 1 つとして, 「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」とされる「汎用的技能」があり, これはスタディ・スキルとも関係が深い。上村, 前掲論文, 83-84 頁。「人的資本」human capital とは, 経済学で使われる重要な概念である。